

## 災害とデマと虐殺—「15円50銭」

ヘイトスピーチという語が日本で社会的関心をあつめるようになって、10年ほどになる。研究の分野では、アメリカなどの「外国の問題／議論」として紹介されていたものが、日本でおきている社会問題としてヘイトスピーチが論じられるようになった。街頭で外国人への差別、攻撃をよびかける集会やデモが多発したことによる。朝鮮学校への襲撃事件もあった。2016年には、ヘイトスピーチ解消法（本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律）ができた。しかし、ヘイトスピーチという語の意味が一般の理解が定着しているとはいえ、「なにかについて批判的なデモをすること」「反対意見をのべること」などと誤解している人も多い。

ヘイトスピーチは、社会的少数者への迫害をよびかける言論／発言であり、「差別扇動」と訳されることもある。たんに「憎悪表現」であるということの問題視しているというよりは、少数者への物理的攻撃＝ヘイトクライム（憎悪犯罪）をひきおこすことが第一の問題であり、少数者の尊厳をふみにじる行為であることが第二の問題である。第三の問題として、憎悪をかきたてるための手段としてデマが活用されているということである。デマがあまりにも流通することによって、否定的なレッテルが、イメージとして、はりつけられてしまうという問題である。さらに第四の問題として、社会の多数派に属する人が被害者意識をつよもち、少数者（＝他者）によって自分たちの地位がおびやかされているとアピールすることで、周囲の共感をえようとするということである。感情にうったえることで同調する人をふやすという戦略がとられている。同調者が多ければ多いほど少数者には脅威になる。

そもそも、差別表現に関しては最近の問題ではなく、テレビや雑誌などのマスコミによる差別報道がくりかえされていた時代があった。マスメディアが差別をひろげるという側面があった。これは現在進行形の問題でもあるが、すこしずつ改善されてきたことも、たしかである。その状況のなかで、インターネットを舞台とする差別扇動が定着し、それが街頭にでてきたのである。

このような問題について、社会言語学においても議論していくことが必要である。最近の文献では山下仁（やました・ひとし）によるものがある（やました2015）。ここでは、安田敏朗（やすだ・としあき）による「虐殺とことば—関東大震災時朝鮮人虐殺と「15円50銭」をめぐる」をとりあげる（やすだ2018:第3章）。

1923年9月1日におきた関東大震災は地震と二次災害としての火事によっておおきな被害をもたらした。さらに、根拠のないデマに扇動された自警団が朝鮮人を襲撃し、虐殺するということが多発した。

安田は関東大震災における朝鮮人虐殺について、歴史と現在のふたつに焦点をあてながら整理している。そのなかで現在の状況にも通じるようなことが指摘されていることに注目したい。

…流言に安易に乗せられていくほど、一般の日本人にとって朝鮮人とは姿の見えないものであった点である。

『大正大震災火災誌』が記すように、「鮮人暴動」などまったくの「杞憂」であったはずなのに、自警団から朝鮮人を守った日本人が日頃かれらとつきあいがあった場合が多かったということがこのことを逆に裏付けている。目の前にいる朝鮮人が、流言でいわれるような行為をおこなったという証拠はどこにもないのに、「不逞鮮人」としてくくられて殺害される無法地帯が出現していた。そこには想像力のかけらもなく、外部・内部からかきたえられた根拠のない憎悪しかない（同上:107-108）。

根拠のない流言によって憎悪をかきたえられた自警団は、安易な判別法で朝鮮人を殺害した。安易な方法であったから、中国人、日本人も殺害された。その日本人には吃音者、ろう者もいた。ことばや知識で判別するという判別法だったからだ。代表的なものとしてあげられているのは「15円50銭」と発音させるというものであり、そのほかに「ザジズゼゾ」「ガギグゲゴ」「座布団」あるいは、「いろはカルタ」「歴代天皇の名前」「教育勅語」の暗誦、「君が代」を歌わせる」といったものがあった（同上:110）。安田はこれらの判別法のうち、「15円50銭」について、くわしくほりさげている。安田は、つぎのように説明している。

この「15円50銭」という識別法がどのようにして確立したのかは明らかにできないものの、語頭に有声音（濁音）がこないという朝鮮語の特徴をとらえたものであることは確かである（同上:112）。

これはつまり、「母語の干渉」ができるかどうかによって朝鮮語話者＝朝鮮人をあぶりだそうとしたということである。人を異化する手段として、言語の知識が活用されている。だれかの発音に「特徴」を見だし、差別するということは、現在でもよく見られる現象である。自分の第一言語にはない発音をどれだけ練習してもうまく発音できないことがあるのは、ごくあたりまえのことである。それを虐殺に利用したのである。

虐殺の加害者にとって、朝鮮人は「姿の見えない」存在であると同時に、敵意の対象でもあった。その敵意の根拠は、植民地支配に抵抗すること（独立運動）であったといえるだろう。水野直樹（みずの・なおき）らは自警団についてつぎのように説明している。

朝鮮人の虐殺に直接手を下したのは、多くの場合、自警団であったが、これは震災に際して在郷軍人を中心とする地域住民が自発的に組織したものである。在郷軍人らの中には、三一独立運動の鎮圧やシベリア出兵、間島出兵などの経験を通じて植民地支配に抵抗する朝鮮人の存在を知った者、あるいは同僚から話を聞いた者も多かった。そのような歴史的経験が生み出した意識や記憶が虐殺の背景にあったと考えられる。

政府は朝鮮人を虐殺した自警団員らを検挙し裁判にかけたが、ほとんどは執行猶予つきの判決により釈放してしまった。結局、虐殺を問題視する国際世論に対する言い訳でしかなく、死者数を正しく調査することも避けたまま、虐殺の責任を逃れることに終始した（みずの／むん2015:21-22）。

国立公文書館アジア歴史資料センターのウェブページでは、当時の首相であった山本権兵衛（やまもと・ごんべえ）が1923年9月5日に発表した告諭「鮮人ニ対スル迫害ニ関シ告諭ノ件」の原文の画像が公開されている（<https://www.jacar.archives.go.jp/das/meta/A01200507700>）。その告諭の趣旨は、民衆が朝鮮人に対して「迫害」をくわえるのは「日鮮同化の根本主義」にそむくものであり、「諸外国に報ぜられて決して好ましきことにあらず」というものであった。

ここにある「日鮮同化」とは、植民地朝鮮における同化イデオロギー／スローガンであった「日鮮同祖」論にもとづくものである。日本と朝鮮はルーツが同じなのだといって日本人に同化することを朝鮮人に要求していたのである。それも非論理的な理屈であったが、デマによる朝鮮人虐殺という暴挙は、そのような建前をくずしてしまう。山本はそれを心配したのだろう。

関東大震災における虐殺問題は、民間の研究者による検証だけでなく、国家事業としても真相究明されるべき歴史であるといえる。

## 災害救助と地域語—「ことばが通じない」ことをめぐって

つぎに、災害と言語という視点から、明治三陸地震と東日本大震災に注目する。

### ・明治三陸地震（1896年6月15日）

1896年に発生した大地震とそれによる津波で、2万6360人が亡くなった（かわにし2001:140）。河西英通はこの大津波による被害者の救助に「意外な「困難」」が当時の新聞で報道されていたことを指摘している。それは第一に「救助の手を払いのける「迷信」の存在」であり、第二に「救助を困難にする「言語」＝方言の存在」であり、第三に東北を「僻地」ととらえる「津波以前にすでに醸成されていた差別的な眼差しの存在」であるという（同上:141-143）。ことばが通じないことについては、たとえば「大津波から約1ヶ月後の7月19日、『時事新報』は「青森沿岸の惨況」と題する記事で「赤十字社医員の話として」、「言語の通ぜざることにて、患者に容体を尋ねれば何か頻りに訴ふるも余程推察して聴取り、わずかに十中一二を解し得るのみ」と報道したという（同上:141）。河西はその後の状況をつぎのように説明している。

…三陸の「言語」は「解し難き」方言、「閉口」する方言として発見・位置づけられ、津波の被害の大きさとともに中央に伝えられたといっただいでしょう。それから10数年後の1909（明治42）年には方言は矯正の対象となり、伊沢修二によって『視話応用東北発音矯正法』が出されるに至ります。同書について、井上ひさし氏は小説

『吉里吉里人』のなかで、「とうとう方言を話す人間を肉体的欠陥者にしてしまった」とコメントしています（同上:142）。

国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp>) を検索すれば、1896年前後に、「方言」についてどのような本が出版されていたのかを確認できる（全文が画像で公開されている）。大津波以前のものをあげれば『方言改良論』が1888年にでていいる。大津波以後には、伊沢の本のほかにも『東北地方発音仮名遣矯正法』が1901年にでていいる。伊沢は1901年に『視話法』を出版しており、ここでは「方言ノ訛ヲ矯正スルニ、視話法応用スルノ例」を書いていいた。伊沢がグラハム・ベルに教わった視話法は、「ことばを矯正する」ための方法論であり、伊沢は「ことばを矯正する」ということをさまざまな少数者に対して実施した（くわしくは次回「ことばを矯正すること」ととりああげる）。

1958年に出版された岩波新書『日本の方言』で柴田武（しばた・たけし）は「方言コンプレックス」についてとりああげていいる。60年ほどの間に、教育やメディアを通じて、地域語の話者は自分の「方言」に劣等感をもつほどになった。そして、「方言コンプレックスをとりさるのにはどうしたらいいか」が議論されるようになったのである（しばた1958:ii）。

## ・東日本大震災以後

2011年3月11日の東日本大震災は、地震、津波、原子力災害の3つによって、かつてないほどの被害をもたらした。1995年1月の阪神淡路大震災がボランティア元年とされ、NPOの活動をうみだしたように、東日本大震災では「方言」が災害救助や復興のためにも重要なことばとして位置づけられた。各地で方言による復興スローガンが使用された。方言研究者は各地の方言について情報提供し、「ことばが通じない」ことを障害にしないように活動してきた。その理念と活動は、2016年の熊本地震などでも継承された。東北大学方言研究センターや福岡女学院大学熊本支援方言プロジェクトの活動は、その代表的な例である。くわしくは以下のウェブサイト／ページが参考になる。

- ・東北大学方言研究センター「東日本大震災と方言ネット」 <https://www.sinsaihougen.jp>
- ・「今村かほる方言研究チーム 医療・看護・福祉と方言」 <http://hougen-i.com>
- ・「医療・福祉・介護従事者と方言プロジェクト」 <http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/hoken/>
- ・文化庁「被災地における方言の活性化支援」 [http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/](http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/kasseikajigyo/)
- ・国立国語研究所「東北方言オノマトペ用例集」 <https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/onomatopoeia/>
- ・「福岡女学院大学熊本支援方言プロジェクト」 <https://www.fukujo.ac.jp/university/other/hougenpjt.html>

## 国境をこえる多言語防災マニュアル／防災教材

2016年7月5日にウルサンで発生した地震以来、韓国では比較的つよい地震が何度か発生した（2016年9月12日キョンジュ、2017年11月15日ポハン）。韓国では高層マンションに居住している人が多い。また、それまでつよい地震をほとんど経験していない。なかでも2016年9月12日の地震は1日のうちにほぼ同規模の前震と本震があり、本震は韓国での観測史上最大規模のものであった。テグ市在住のわたしの友人も死を覚悟するほどの恐怖を感じたという。

当時、韓国のSNSやメディアで注目をあつめ、共有されていたのが東京都が作成した多言語防災マニュアルの『東京防災』韓国語版だった (<http://www.bousai.metro.tokyo.jp/bousai/1000031/1003770.html>)。地震発生後に、どのように行動すればよいかを絵をまじえて説明する冊子であり、PDFでも公開されている。アプリ版もある。東京都は冊子を都内の全戸に無料配布した。日本国内に居住する非日本語話者のために多言語対応したものが、国境をこえて活用されたのである。

『稲むらの火』も、国境をこえて津波についての防災教材として活用されている。ウェブで「inamura no hi」と検索すると、その状況が確認できる。「世界津波の日」が11月5日になったのは、この「稲むらの火」にちなんでいる。

和歌山には「稲むらの火の館 濱口梧陵（はまぐち・ごりょう）記念館 津波防災教育センター」があり、そのウェブサイトは多言語に対応している (<https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>)。

災害の経験を伝承するということは、子孫のためでもあり、同時代を生きる世界のためでもある。

## 世界に学ぶ、地域に学ぶ

2016年以降でいえば、日本では熊本、鳥取、茨城、大阪、北海道で比較のおおきな地震があった。災害としては地震のほかにも大雨（豪雨）や台風、大雪による被害がつづいている。猛暑というあたらしい災害もある。

なかでも2018年7月の局地的大雨による被害は甚大であり、日本の災害避難所のありかたについて議論がおきた。「スフィア基準」をキーワードに、避難所の改善が必要であると指摘されている（NHK災害列島命を守る情報サイト「避難所の女性トイレは男性の3倍必要～命を守る「スフィア基準」」 [https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20180501\\_01.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20180501_01.html)）。

2011年に難民支援協会が日本語に訳し、ウェブに公開している『スフィア・ハンドブック』が参考になる（<https://www.refugee.or.jp/sphere/>）。

東日本大震災以後、津波から逃げるときの方針として「津波てんでんこ」の重要性が指摘されている。津波てんでんこは津波被害を何度も経験してきた東北で継承されてきたものである。日本気象協会によるウェブサイト「tenki.jp」では2015年に「東日本大震災から4年。三陸地方に伝わる言葉「てんでんこ」が伝えること」という記事を掲載している（[https://tenki.jp/suppl/emi\\_iwaki/2015/03/10/2161.html](https://tenki.jp/suppl/emi_iwaki/2015/03/10/2161.html)）。その記事では、「三陸地方に伝わる言葉「てんでんこ」という見出しを見つけ、「てんでんこ」の意味をつぎのように説明している。

東日本大震災発生直後、街に鳴り響いた津波襲来を知らせるサイレン。港に近い水産加工会社で作業をしていた社員は、強い余震が断続的に続く中、作業場から外に飛び出し、辺りの様子をうかがいます。時同じく、社長室から作業場に駆け込んできた社長は、「津波てんでんこ」「高いところへ逃げろ」「早く逃げろ」と大声で連呼し、従業員を裏山の高台に避難させます。結果、社長の的確な指示によって、全従業員が命を取り留めたといいます――。

過去にいくども甚大な津波被害に遭ってきた三陸地方に伝わる言葉「てんでんこ」には、「各自」「めいめい」の意味があります。

「津波てんでんこ」なら、「大地震がきたら、一刻も早くめいめいが高台へ逃げろ」。

「命てんでんこ」なら、「自分の命は、なんとしてでも自分で守れ」。

こうした言葉が受け継がれてきた背景には、過去の地震・津波の際に、家族や知人を助けにいったことで避難が遅れ、多くの死傷者が生まれた事実があるからです。

つまり、大地震が起きたら取るものもとらず、各自てんでんばらばらに高台に逃げることで、結果として全員が助かるというという意味が「津波てんでんこ」「命てんでんこ」には含まれています。

そして、もし自分が高台に逃げたことで、結果として他人を助けられなかったとしても、それを非難してはならないという不文律も、この言葉には含まれています。

過去の災害に学び、今後の防災・減災に活用するためにも、体験者の語りを記録していく必要がある。その語りをアーカイブとして保存し公開していく必要もある。国立研究開発法人防災科学技術研究所自然災害情報室は「災害資料アーカイブ機関」の連携をすすめており、ウェブサイトでは日本各地にある災害アーカイブの一覧を公開している（<http://dil.bosai.go.jp/link/archive/>）この一覧にあるもの以外にも多数のアーカイブがあり、「災害 アーカイブ」でウェブを検索すると各自治体によるものや新聞社によるアーカイブが見つかる。

人はどのようなことばで、被災を語るのか。その人のことばで、その人らしく語れることが大事だろう。しかし被災にともない移住せざるをえない状況においやられる人もいる。コミュニティが離散してしまうこともある。そうなる、こどもは地域語をわすれてしまいやすい。高齢者は孤立しやすい。世代間で断絶がおきる。それでは地域の知恵が継承できない。災害がひきおこす言語問題は、いまもつづいている。

そして、災害によって見える化される言語問題の多くは、平時と連続しているものであり、日常の問題でもある。災害によってあきらかになった言語問題のひとつひとつを、ていねいに検証し、改善していくことがもめられる。それが最大の防災であるといえる。

## さらなる論点

- ・災害時（と平時）を念頭においた情報発信としての「やさしい日本語」
- ・避難をよびかける表現は、どのようにあるべきか
- ・信頼性のある情報とはなにか
- ・メディアの多言語化、バリアフリー化
- ・観光客への災害対応
- ・災害情報（ショッキングな映像）をながさないチャンネルの必要性
- ・記憶の継承とトラウマへのケア
- ・ラジオの重要性
- ・安否確認の方法
- ・災害時の運行情報／交通情報
- ・災害ハザードマップ（防災地図）の周知
- ・あたらしい災害としての40度前後の猛暑

## 参考文献

- 今村かほる 2015 「医療・福祉と方言」 『方言の研究』 1号、133-159
- 岩城裕之（いわき・ひろゆき） 2012 「医療従事者のための方言の手引き」 『日本語学』 36-45
- 大内齋之（おおうち・なりゆき） 2014 「臨時災害放送局における方言利用の意義に関する考察—福島県富岡町「おだがいさまFM」を事例として」 『現代社会文化研究』 59、1-18
- 大内齋之 2018 「東日本大震災における臨時災害放送局の実態研究—方言番組を制作した福島・富岡町のおだがいさまFMを事例として」 『環日本海研究年報』 23、83-110
- 大野眞男（おおの・まさお）／小林隆（こばやし・たかし）編 2015 『方言を伝える—3.11東日本大震災被災地における取り組み』 ひつじ書房
- 岡本真一郎（おかもと・しんいちろう） 2016 『悪意の心理学—悪口、嘘、ヘイトスピーチ』 中公新書
- 外国人地震情報センター編 1996 『阪神大震災と外国人—「多文化共生社会」の現状と可能性』 明石書店
- 加藤理（かとう・おさむ） 2013 「東日本大震災下における地域文化としての方言と子ども」 『子ども社会研究』 19、5-19
- 加藤直樹（かとう・なおき） 2014 『九月、東京の路上で—1923年関東大震災ジェノサイドの残響』 ころから
- 河西英通（かわにし・ひでみち） 2001 『東北一つくられた異境』 中公新書
- 櫛引祐希子（くしびき・ゆきこ） 2015 「老いと孤独に寄り添う方言—東日本大震災高齢被災者へのインタビュー」 『研究助成論文集』 51、105-114
- 後藤典子（ごとう・のりこ）ほか 2012 「介護現場の山形地域語教材『聞いてわかる介護の山形ことば』の開発」 『日本語教育方法研究会誌』 19(1)、48-49
- 駒井洋（こまい・ひろし）監修／鈴木江理子（すずき・えりこ）編 2012 『東日本大震災と外国人移住者たち』 明石書店
- 柴田武（しばた・たけし） 1958 『日本の方言』 岩波新書
- 総務省消防庁「外国人来訪者や障害者等が利用する施設における災害情報の伝達及び避難誘導に関するガイドラインリーフレット」 <https://www.fdma.go.jp/mission/prevention/post-3.html>
- 東北大学方言研究センター 2012 『方言を救う、方言で救う—3.11被災地からの提言』 ひつじ書房
- 友定賢治（ともさだ・けんじ） 2014 「「臨床方言学」の確立に向けて」 『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』 14(1)、37-49
- 水野直樹（みずの・なおき）／文京洙（むん・ぎよんす） 2015 『在日朝鮮人』 岩波新書
- 安田敏朗（やすだ・としあき） 1999 『〈国語〉と〈方言〉のあいだ』 人文書院
- 安田敏朗 2018 『近代日本語史再考Ⅴ ことばのとらえ方をめぐって』 三元社
- 山下仁（やました・ひとし） 2015 「ヘイトスピーチを「ことばの暴力」として考える—批判的社会言語学の観点からの一考察」 『言語文化共同研究プロジェクト 2015』（大阪大学大学院言語文化研究科）、3-15
- 山下文男（やました・ふみお） 2008 『津波でんでんこ—近代日本の津波史』 新日本出版社
- 山中速人（やまなか・はやと） 2011 「多文化社会状況とコミュニティラジオ—多言語放送局FMわいわい（神戸市長田区）の経験と課題」 『マス・コミュニケーション研究』 79、85-108

吉富志津代（よしとみ・しづよ） 2013 『グローバル社会のコミュニティ防災』 大阪大学出版会

吉村昭（よしむら・あきら） 2004a 『三陸海岸大津波』 文春文庫

吉村昭 2004b 『関東大震災』 文春文庫

## 雑誌特集

『精神医療』 4-6号（1994年）「特集 方言で語る精神医療」

『月刊言語』 2009年8月号「特集 緊急時コミュニケーション—命綱としてのことば」

『自治体国際化フォーラム』 239号（2009年）「特集 多文化共生の視点を取り入れた防災・災害時支援」

『日本語学』 2011年2月号「特集 医療のことば」

『自治体国際化フォーラム』 262号（2011年）「特集 東日本大震災における外国人支援について」

『日本語学』 2012年5月号「特集 災害とことば」

『自治体国際化フォーラム』 287号（2013年）「特集 在住外国人に伝わる広報」

『Sai』 69号（2013年）「特集 関東大震災90年 朝鮮人虐殺と追悼」

『歴史地理教育』 2013年9月号「特集 関東大震災時の朝鮮人虐殺」

『コリア研究』 5号（2014年）「特集 関東大震災朝鮮人虐殺から90年」

『大原社会問題研究所雑誌』 668号/669号（2014年）「特集 関東大震災90年—朝鮮人虐殺をめぐる研究・運動の歴史と現在(1)/(2)」

『自治体国際化フォーラム』 332号（2018年）「特集 災害時における外国人支援」

『自治体国際化フォーラム』 359号（2019年）「特集 災害時の外国人住民・訪日旅行者支援～2018年に発生した災害から学ぶ」

## 関連雑誌

『災害情報 日本災害情報学会誌』

『放送研究と調査』

『災害復興研究』

## 学生のコメント

こないだ日本語教室でネパール人男性の学習支援を担当したのですが、「ソ」と「シヨ」の発音の区別が出来ていないようでした。「全然違うんだけどなあ」と思ってしまったのですが、音韻と音声の差異かなとも思いました。彼の母語において「ソ」あるいは「シヨ」の発音が存在しないか、両方あっても区別がないから、発音分けができないのかもしれませんが。日本語母語話者は子音だけの発音を自分で意識して発音するのは難しいから、その方も発音分けは同じ人間だから可能だろうけれど、意識して分けるのは難しいのかも…と感じました。／中学の英語の先生が「水のことウォーターって発音するけど、向こうの人たちそうやってしっかり発音しないからね。『ウォラッ』で通じちゃうよ。『ウォラプリーズ』でちゃんと水出してくれると思う」と話していたのが印象的でした。私にとっては『ウォラ』と『ウォーター』ってもう別の語彙に思えるのですが、ネイティブの人にとっては許容できる範囲のバラエティにすぎないんだなと、認識の差に驚きました。

【あべのコメント：ひとが話すとき一語一語をくっきりしゃべるわけではないので、ながれよく発音するなかで無意識に、「あつというま」が「あっちゅーま」になり、「そこへ」が「そけー」になるのですね。「こないだ」もしかり。「そけー」というのは岡山くらいかもですが。フランス語のリエゾンだって、べつに「ルール」を意識してそう発音しているのではなくて、無意識なわけですね。学習者だから、たとえば「suis」の発音を「ルール」として覚えようとするわけで。／イギリス英語だと「ウォーター」と発音するのが一般的なイメージがあります。】

…僕は塾で小学生の子に英語を教えています。その子は「英語＝（白人・黒人の）アメリカ人が話すことば」と考えてしまっています。

…自分が学んでいる言語…について。非難めいたことは言われたことはないですが、ロシア語なのですが、必ずなん  
で？！って驚かれました。英語と答えると、ふ～んって感じなのに身近さとかの問題だと思うんですけど…。…後略…

【あべのコメント：ロシアは、となりの国ですから、距離的には身近なはずなんですけどね。】

…私はポルトガル語を学習していたので、ポルトガル語の短期研修へ行きたいと家族に話したら猛反対されて、「なんで  
英語じゃなくてポルトガル語なの？」と言われました。私の意見ではなんでそこで英語を引き合いに出してくるのだらう  
と感じたし、将来直接仕事につなげることしか考えてないのかなととても残念に思ったのを覚えています。言語の中にあ  
る文化を知り、自分の視野を広げたいという理由ではあまり納得してくれなかったです。／ポルトガル語のあいさつを留  
学中にあったブラジル人にしただけで、ポルトガル語を勉強してる子に初めて会ったと喜んでくれました。授業にあった  
とおり期待値の低さの表れだなと思います。

【あべのコメント：文化を知り、視野を広げるという目的でじゅうぶんですよ。あえて反論するなら、みんなと同じこ  
としてしょうがないでしょ、ニッチをつかんだほうが有利なこともあるでしょ、などということもできるでしょうね。  
経済の論理に経済の論理で反論しても相手の価値観にあわせてしまっているのでもつまらないですが。でも英語できる人  
なんて、あふれるほどいるわけで。】

言語と方言の区分に関して、AとBという言語／方言があった場合、互いの話者が意味を分かり合うことができたなら同じ  
言語という基準を想定してみた。しかし世界的にそれぞれ独立した言語と認知されているスペイン語とポルトガル語とい  
う具体例では、互いの話者の会話は成り立つという（ブラジル人友人談）。言語と方言の区別に必然性はなく、社会的  
な（民族、政治等）背景に基づく恣意的なものではないかと感じる。…後略…

【あべのコメント：言語学の入門書に、そのとおりのことが書いてあります。相互理解度（mutual intelligibility）があ  
るかどうか、自治権のある「領域」をもっているか、つよいアイデンティティがあるかなどがポイントです。多くの人が、  
「われわれの言語は方言などではなく独立した言語だ」と主張し、周囲も同調するなら「ひとつの言語」になります。】

以前ゼミで読んだ文献で街の道路などに見られる標識案内のローマ字表記について書かれていた。その文献では外国人  
留学生100人にローマ字の長音表記について尋ね、どのローマ字の長音表記が外国人にとってわかりやすいのかを調査し  
ていた。その調査によると、「長音の母音の上に「-」がつく表記（jō）が最も外国人にとってわかりやすいとされてい  
た。その次に「長音の母音を重ねてつける（joo）」、3位に「長音を表記しない（jo）」がきていた。外国人がわかり  
やすいとした表記は日本語でそれを読む、発音する時と同じ音、発音するためにわかりやすい表記方法だなと感じ  
た。…後略…

【名前のローマ字表記】例えば「りょうすけ」という名前であれば「Ryosuke」か「Ryousuke」かで迷います。…後略…

【あべのコメント：「Ryousuke」はローマ字入力のつづり（＝現代かなづかいをそのままローマ字転写したもの）にす  
ぎないので、あくまで「Ryōsuke」「Ryōsuke」「Ryosuke」が適切でしょう。長音であることを明示しないのはよく  
ないとおもうので、「Ryoosuke」と母音をかさねるのもいいはずですが、あまり普及していない。】

…オーストラリアに行った時、「center」のつづりが「centre」となった時、変じゃないか、まちがっているのでは  
ないか、と思い、先入観があったと思いました。

小学校の京都への修学旅行で「外国人に英語で話しかけてみよう」がありました。発言していた方と同じで、サインも  
もらわないといけなかったです。普通の公立小学校で英語学習もほぼない環境だったので何といったらいいかもわから  
ず困っていたところ、近くにいたタクシー運転手の方が外国人に私たちの求めていることを伝えてくれてサインをもらい  
ました。ただ、その後の発表など何もなく、今思えば無意味でした。／スペイン語を学んで何の役に立つんだ、と同級  
生で中学の時の先生に聞かれました。どこに就職するんだ、ともきかれました。就職のために大学の勉強があるなら、  
大学の意味がなくなるのでは、と思います。／スペイン語（カスティーリャ語）を学んでいる立場として、カタルーニャ  
地方出身の先生の教えるカスティーリャ語の発音を不満に思ったことがあります。（スペインは地方ごとに、方言とは違  
うレベルに違う固有言語があります。ただ、国民全員カスティーリャ語を話せます。）

【あべのコメント：「外国人に話しかけてみよう」の質問内容、ヤフー知恵袋の定番質問になっていますね…。】

-----

…小学校で京都に修学旅行に行ったときにありました。京都での自由行動中に「どういう目的で来たのか?」「どこから来たのか」などの質問を必ず外国人観光客の1グループにしなければならないという課題で、修学旅行のしおりの中に外国から来た人に質問しよう!というページがあったのを覚えています。小学生の頃は「白人=英語が話せる」というイメージを勝手に持ってしまっていて最初に話しかけた人たちが白人でも英語を話さない人たちで自分たちも困って、向こうも困ってしまったという記憶があります。今考えるとすごく失礼な事をしてしまったなと思います。また、2回目に話しかけた人たちがすごく丁寧に私たちにも分かるように答えてくれ、それを見ていた他のグループが再びその人たちに質問をしていて、せっかくの旅行中なのに足止めをくらってしまうのはかわいそうだなと思ったのを覚えています。

-----

…修学旅行のしおりのページに質問を準備して、実際に聞いてみましたが、相手が私たちの言っていることがわからず、質問の文字を見せた覚えがあります。

-----

小学校の修学旅行で京都・奈良に行きました。外国人に英語で話しかけて、出身地を訊き、サインをもらう、という課題がありました。会話のテンプレみたいなものが用意されていて、相手が応えてくれたら、「I see.」と返すことになっていました。印象に残っているのは、ドイツ人の男性に話しかけて、出身地を教えてくれたのですが、猛烈な勢いで話されたのでほとんど何もわからなかったことです。しかし、I see. と言うことになっていたので、そう返したら、全然分かってないじゃん(笑)というようなりアクションをされました。こういう課題に意味はあるのでしょうか。/レジメの冒頭にある、「自分たちがはなしていることばに否定的な名前(あだ名)をつけられることもある。」というところについて、私は岐阜県出身であるが、岐阜弁は時折「エセ関西弁」といわれることがある。岐阜弁を文字に起こすと、「や」など関西弁に多く見られる言葉があるが、話すイントネーションは全く関西弁と違うからだろうと思うが、岐阜弁を否定されているようであまり好きではない。

【あべのコメント:「エセ関西弁」というレッテルはほんとうにひどいですね。三重の人なども経験しているそう。】

-----

…バイト先で「大学でドイツ語を学んでいます」と言うとたいてい「何でドイツ語!？」のように過剰に反応されます。

【あべのコメント:近代の日本では、ドイツ語は「外国語学習」の定番のひとつだったのですけどね。医学とドイツ語のむすびつきも当時は強かったし。哲学でもドイツ語もできないと…みたいな風潮がありました。時代の変化です。】

-----

…アルバイト先に来る外国人のお客様には、まず、「いらっしゃいませ」と声をかけます。何かお探しのときは、その方が話す言語で話しかけてくださります。最初から決めつけずに日本語で話しかけると、日本語でお話はずむときもあります。

-----

私は「英語ができれば世界中の人と会話できるようになる」というのは間違いではないと思います。そもそも、世界みんなが絶対話せる言語はないです。そうすると、大言語で、比較的多くの人と話することのできる英語が話せる=世界中の人とコミュニケーションとれる、ということになるのではないのでしょうか。

【あべのコメント:英語といっても、世界のどこの英語にもすべて特徴があります。日本語話者はアメリカ英語ばかりになれているので、アメリカ英語以外の特徴になれていないし、なれようともしていない、つまり実際は「世界」を意識はしていないということです。英語というとき、なんとなく世界はイメージしているけれども、各国のメディアが英語で発信している情報に接しているわけでもない。そういう意味で、広告の文句とはズレがあるということです。】

-----

日本の植民地政策について、当時の右翼と呼ばれる人たちは日鮮同祖論を謳っていて、現在の右翼たちは日本と朝鮮の違いを打ち出すようになっていて、結局自分たちの信じたものだけを信じているだけなんだと思った。高校の友達で父親が中国人、母親が日本人の子がいて、その子は中学2年生まで中国で育っていたのでセンター試験は中国語で受けていました。彼は英語もそれなりにできるのに何でだろうと思った僕は彼に聞いてみると、「中国語のテストは簡単で誰でもとける」と言っていて僕ははずるいと思いましたが、今になって単純に彼がかしこいだけだと分かりました。

【あべのコメント:日本が植民地政策として「内鮮融和」「内鮮一体」「内鮮同化」などのスローガンをかかげていたことをなかつたことにしたい人がたくさんいますね。】

-----